

**第6回京都市総合計画審議会
議事録**

日 時：令和7年5月12日（月）17:00～19:35

会 場：京都経済センター「6-C」会議室

出席者：

1 京都市総合計画審議会委員（五十音順、敬称略）

赤松 玉女	京都市立芸術大学名誉教授
安保 千秋	弁護士
小川 さやか	学校法人立命館副総長／ 立命館大学大学院先端総合学術研究科教授
阪部 すみと	Tsunagary オフィス合同会社最高執行責任者
杉田 真理子	一般社団法人 for Cities 共同代表/都市デザイナー
鈴鹿 可奈子	株式会社聖護院八ッ橋総本店代表取締役社長
曾我 謙悟	京都大学公共政策大学院院長
高屋 宏章	社会福祉法人京都市社会福祉協議会会長
貫名 涼	京都大学地球環境学堂助教
濱崎 加奈子	公益財団法人有斐斎弘道館館長／ 京都府立大学農学食科学部准教授
原 敏之	日本労働組合総連合会京都府連合会会長
福富 昌城	花園大学社会福祉学部長
藤野 敦子	京都産業大学副学長・現代社会学部教授
プラー ポンキワラシン	市民公募委員
松井 道宣	一般社団法人京都府医師会会長
宗田 好史	関西国際大学国際コミュニケーション学部教授／ 京都府立大学名誉教授

2 特別委員

野村 将揮	ハーバード大学デザイン大学院／京都哲学研究所／ Yamauchi No.10 Family Office／京都大学成長戦略本部
-------	--

以上17名

1 開会

司会（都市経営戦略監）

ただ今から、第6回京都市総合計画審議会を開催する。委員の皆様におかれては、大変お忙しい中、お集まりいただき感謝申し上げます。

本日は、21名中17名の委員に御出席いただいている。審議会は公開とし、報道関係者席を設けるとともに、市民の皆様方に傍聴いただいている。また、記録のために録音、録画を行うが、御了承いただきたい。

審議に移る前に、配布資料について補足する。資料2は、長期ビジョン本文案における第四章と第五章について、これまでの審議会における委員の皆様の御意見を紐付けた資料である。議論の参考として御覧いただきたい。

2 議事

（1）長期ビジョン（仮称）に係る審議

司会（都市経営戦略監）

それでは、ここからの進行については、宗田会長にお願いする。

宗田会長

早速だが、皆様のお手元には「長期ビジョン（仮称）本文（案）」をお配りしている。まずは、野村特別委員から御説明を伺った後、委員の皆様の御意見を伺っていききたいと思う。

それでは、野村特別委員、よろしく願います。

野村特別委員

全体の執筆に当たっての総論を軽く申し述べた後に、中身の説明に入っていきたい。

先立って、前回の審議会に出した序文、お手元の資料の1ページと2ページだが、こちらは全て僕が一言一句書かせていただいたものであり、前回の審議会で主に3つの御意見を賜った。

1点目は、貫名委員から、第1パート、つまり1ページ目の最初の「人間は過去に生かされ」のパートについてである。「私たち京都市民は、幸運にも近年の戦禍を免れてきた」から始まる部分の末尾に「これらの継承者でもある」と書いているが、「創造する」というようなニュアンスも付記したほうがよいという御指摘があった。原文のままでお持ちしたのは、「これらの継承者かつ創造者」にするなどの案をかなり時間をかけて考えたが、収まりが悪く、良い案が思い浮かんでいない。本日お持ちした本文では、市民が伝統を享受するのみならず、文化・伝統の創造の主体であることは幾度も言及した。序文のこの点については、語感および長さを加味して、良い言葉が入れば書き加えるが、一旦このままでお出ししている。御了承いただければと思う。

2点目がこの一行上の一文である。末尾に「市井の人々の愛着と創意とに支

えられて残存してきた」と記載しているが、安保副会長から、少し全体を通して敷居が高いため、特に文化創造周りは市井の人々も積極的にそれに参画してきたというか、尽力されてきた点も書き加えたらどうかと御指摘をいただいた。御指摘はごもっともである前提で、既にこの序文自体がかなり長いので、大変恐縮だが本日お持ちした本文の記載で読み込むということで御理解いただきたい。

最後に、こちらにも極めてごもっともな点として、審議会後に、1 ページ目の最初の六行に記載している「歴史と文化を介して人間性を恢復できるまち」「自然への畏敬と感謝を抱けるまち」「自他の生をともに尊重し合えるまち」の3つと、この序文の各パートの形容・言葉があまり対応していないという御指摘を頂戴した。熟慮した末に、本文の第四章の節名で受ける形、すなわち、後述するように、それぞれ「●●なまち」とすることでこれを引き受けているということで御了承いただければと思う。

いずれも御指摘は全てごもっともながら、基本的には本文で受ける形を想定している。繰り返し、御指摘はごもっともであり、1 時間や2 時間では済まない時間をかけて考えたが、出てこなかったのが正直なところである。今後も良い案が浮かばなければこのままということで御了承いただければと思っている。序文については以上である。

全体の執筆過程について説明を差し上げる。第一章と第二章は、前回の審議会に先立って私が書いていた2 万字バージョンを、事務局と相談して圧縮しながら執筆した形になる。第一章が策定の背景ということで、この長期ビジョン（仮称）が世界文化自由都市宣言の系譜にあり、さらには2050 年以降にも系譜としてつなげていきたいということで、過去の経緯等を記したものとなる。

おめくりいただいて第二章である。一応、この第二章も序文冒頭の三行分の文章にそれぞれを引き受けるような構成を意識はしたところだ。

第三、四、五章は、かなり事務局に草案いただき、僕のほうで、表記、論理、全体の構成を修正させていただいた形となる。

委員の先生方皆様にも御経験がおありかと思うが、僕自身も行政官として経験したこととして、行政文書として細かくロジックを積み上げて教科書的になってしまうとむしろ市民の方々に届きにくい。また、具体的な政策につなげることを想定してさまざまな観点を含まなければならなかったところ、どうしても論理の飛躍に見えるところや、急に別の話が出てくるように見えるところもあるかと思うが、文量の制限上でやむを得ず受忍している。

これまでの議論も踏まえて、京都市が「学藝のまち」ひいては「学藝の府」であることを、市内の皆様はもちろん、市外の方、ひいては世界中の皆様にも改めて掲示をしたいということで、できるだけ書き下すような書きぶりをしている。

本文は、一文一文、事務局の皆様ともかなり綿密に調整を重ねた。繰り返しだが、今後25 年の政策の礎となるものなので、第二章はある程度は人文系の

研究者然としたようなところもあるが、相対としては具体的な政策を念頭に事務局の皆様と擦り合わせながら意向に即して執筆・加筆修正したものとなる。

本日これから皆様から御意見をいただきながら議論させていただきたいが、いわゆる「グレーター京都」や、これは一気に話が飛ぶが、11ページ、第五章の中段あたりに「私たち京都市民がめざすまちの姿を実現していくためには、従来の狭義の市民の枠組みに囚われることなく、人生や日常のほんの僅かな一部であっても、京都市の現在と未来をともにつくってくれるこれらの人々、いわば広義の京都市民と、積極的に協働していくこと、言い換えれば、多義的な市民性を促進していくことが不可欠である」と記載している。これはこの審議会および未来共創チーム会議での議論であった、いわゆる「0.1市民」という形容を書き下したものである。

「グレーター京都」や「0.1市民」という形容を用いていないのは、かなり悩みながら事務局の皆様とも議論させていただいたが、やはり、ある種のキャッチーな言葉はあえて使わないほうが京都的であると思われたことに加え、この文章全体の趣旨にそぐうのではないかと思われたことから、むしろ紙面を割いてこのように書き下した。

テクニカルには、例えば「グレーター京都」で「グレート」と言ってしまうと、大きいものが良いというような、進歩主義的な思想が不可避免的に含まれてしまう。あるいは「0.1市民」となると「いや、0.1じゃなくても0.5もあり得るし、ひいては1.1市民や1.8市民、もしくは2.5市民もあり得る」というように、必ずしも10分の1といった単位に限定されるものでもないという議論もあり得る。そうなった時に、このような単純化を意識的に避けながら、意図的に少し言葉を堅く、かつ、言ってしまうと冗長になっているところも承知をしつつ、書き下して趣旨をお伝えしようと考えたものである。

最後に、結びの部分も事務局の皆様および市長とも本当に幾度と議論させていただいた。この種の行政文書は、特に私の書いた文章が既に長いことに加えて、言葉も堅めなので、市民の皆様方にある種の当事者意識や当事者性を持って自ら問うていただくようにしたいとの御意見を反映させた。特に市長からのお話で本当にごもつともだと思ったのが、例えば、10年、15年、20年、25年後の小中学生、高校生が、この文書を、例えば、学校やいろいろな場で触れた時に、この問い掛けをもとに何か考えてもらえる材料になるといいと思い、こういった結びを採用した。そして、この結びを採用することを想定して、第二章はあえて硬めで、かつ抽象度高く、京都のこれまで、京都市は何たるかを、委員の先生方の御意見や御知見を踏まえ、私なりに書き下したものである。簡単ではあるが、説明は以上とする。

宗田会長

今の御説明を受けて、松井市長からも一言いただきたい。

松井市長

お忙しいところをお集りいただき感謝申し上げます。私は諮問をしている立場なので、あまり言わないほうがいいかもしれないが、そのような審議会の在り方も含めてチャレンジをしたいと思っているので、あえて発言させていただく。

1週間くらい前に、草案について、事務局と野村特別委員とで相当議論をした。私自身の考え方を一言申し上げると、行政文書というものには、本来、執筆者というものはない。伝統的に言えば、あまり執筆者や草稿者という言い方はしないほうが良いのかもしれないが、私は最初の頃からそういう言い方を用いている。例えば、鷺田清一先生の名前を出しているのは、現行基本構想では、執筆者の個性を、事務局も含めて何十回も推敲を重ねて作ったものだからだ。そのため、野村特別委員に京都市役所として草案作成の責任を負っていただくという意味では、口調は執筆者のある種の個性であり、それをどこまで審議会が許容するかに委ねられている。

野村草稿執筆者、特別委員に、相当程度の時間を取っていただき、今御説明があったような文案を作成していただいた。「0.1市民」という非常にユニークなワーディングも含め、このような考え方をに入れてほしいと、野村特別委員が許容できるボキャブラリーの中で取り入れてほしいと言って、ずいぶん苦労してもらった結果である。

事務局や野村特別委員とも議論する中で、行政文書で京都のまちの課題と解決策の在り方を示しても、それは私が今回求めるものではない。今、野村特別委員が発言されたように、10年後や15年後になれば、この2025年時点で作成した文書について、将来の世代が「いや、どうなのかな」と感じる事が起こるかもしれない。今はまだこの文書を読まないような小さな子どもたちも含めて、2025年時点でこのような文書を京都市は英知を集めて作ったけれども、今の京都市はどうなっているのだろうか、この文章自身の在り方、あるいはそれがどう京都市に反映されるかを常に問い掛けられるようなものであってほしい。私の一番のこだわりはそこである。この文章が全ての京都市民に共有されるわけではないが、できるだけ多くの京都市民がこの文章を受け止めて「じゃあ、私にとっての京都市はこうなのか」「これでいいのか」という問い掛けが、現在、将来において行われるような素材を作してほしい。

総合計画審議会の委員の皆様方にも、そのような視点で、この文章が将来にわたって京都市民に対して問い続ける、そして同時に京都市役所は、この文章に照らして、我々は恥ずかしい行政をしていないかどうかを常に突き付けられるような文章であってほしいと思っている。

積極果敢な御議論をいただけたら大変ありがたい。

宗田会長

審議会がまず松井市長にとって居心地の良い審議会であってほしいと思う

が、審議会委員の皆様にとって居心地の良い審議会、発言しやすい審議会、自分の考え、自分の問い掛けを常に皆さんに発信できるようにと思っている。行政文書であることや誰が起案したといったことに関わりなく、皆が一緒に作業に加わったということが重要。

松井市長

1点申し上げると、「学藝があふれる」という言葉を使用しており、初見の方から見るとやや唐突感があるかもしれないが、その中身も含めて議論していただきたい。

京都市民を一番大切にしなければならないが、京都市民以外にも、京都を愛する人たちがおられる。リージョナルコミュニティ以外にも、テーマ型コミュニティというものがあり、例えば、茶道、華道、神社仏閣、お豆腐屋さん、お漬物屋さん、銭湯に至るまで、京都ならではの生活文化というものがあり、そこに対するファンのつながりがある。このような人たちの京都への思いも含めて受け止められる職人さんや文化の担い手のような方々が、現在、京都の中で高齢化が進んでおり、このまま放っておくと減ってしまうかもしれない。これを何とか残して、そして次の時代にふさわしい人材、京都への愛着の一つの中心軸になるような方を、どれだけたくさん揃えるか。そのことが、私にとっては「突き抜ける世界都市」という、それぞれの分野のすばらしい才能、あるいは愛情の一つの結節点になるような人たちのつながりとしての京都である。京都市民だけでなく、愛着を持ってつながっている人たちを、どのようにつなぎ留めて、そして京都市を磨いていくのかという考え方は、私が3年間の行政計画の中で大切にしたいことである。そのため、「学藝が溢れるまち」という言葉を長期ビジョンの本文案に取り入れてもらっている。

宗田会長

市長の発言は、高齢化しつつあるが、そういった匠と呼ばれる人たちを温かく迎え、そしてそのような人々が暮らす居心地のいいまちでありたいということだろう。そのことによって世界に突き抜ける。それが観光の真髄でもあり、文化交流の真髄でもあるということだ。

それでは、委員の皆様から意見を伺いたい。まずは、福富委員に発言をお願いする。

福富委員

本質的な議論の前に2点申し上げる。

1点目。6ページの第二節の三段落目の「精神疾患の増加」について。デジタル化の進展に伴う文脈と思うが、SNSなどが多く使われることによって精神疾患が増えるというような表現になっている。広い意味ではそのとおりであり、うつ病や不安障害に関してはSNSとの相関関係があるという研究論文が発表されている。しかし、日本語の精神疾患という言葉聞いて一般の

人が最初に想像するのは統合失調症だと思う。きちんと精神疾患やメンタルヘルスのことを分かっている方は内容が理解できると思うが、「精神疾患＝統合失調症」と受け取られた時に、統合失調症の人たちに対するネガティブなイメージを助長することが少し心配である。精神的な健康を害する人が増えてくる、あるいは、メンタルヘルスの悪化が増加するという意味合いだと思うので、「精神疾患」という用語以外で、そういった意味合いが分かるような言葉に置き換えられると良いのではないか。

2点目。第四章第二節（3）「支え合いの中で日々の生活を営める」、二段落目の二行目から三行目「これらを楽しむ側、つまりケアを受ける側となった際にも、心からの感謝を胸に抱くことができる」について。ケアを受ける側になったら感謝しなければいけないというようにも読めてしまう。ケアを受けた結果、感謝をするのはそのとおりだと思う。ケアを受けたり支援を受けている側も、自分たちの力で今度は何かを返したりというようなことも含めて、「強い人がもしかしたら弱いかもしれないし、弱い人がもしかしたら強いかもしれない」というニュアンスになるほうが良いのではないか。「ケアを受けている人は感謝しなさい」というような読み取られ方をするのは趣旨とは異なるのだろう。

野村特別委員

2点とも全くごもつともな御指摘で、そのように修正できたらと思う。余談だが、福富委員の1点目の6ページについての御指摘は本当にそのとおりで、今、スマホ、SNS等の使用によって、うつ病等のメンタルヘルスの不調、悪化が生じるという因果関係までは言われていないと、僕も理解している。あくまで相関関係だということは、この審議会で誤解を生まないように確認しておきたい。福富委員の御指摘のとおりと承知している。

貫名委員

最初に、前提条件として申し上げておかないといけないと思っていたことを申し上げる。第三章第二節の環境に関する部分について。気候変動に関する記載について、「気候変動が顕在化している」「豪雨、猛暑日が増加している」までは良いが、それ以降の、植物とこれらの在来種が消失の危機に瀕しているという記載は誤りではないか。これらが危機に瀕しているのは確かだが、気候変動が主な原因ではない状況であるため、このまま読むと気候変動によっていろいろな植物が消失の危機に瀕していることになる。この点は要修正ではないか。今現在の課題としては、自然との関係性、関わりの希薄化のようところが主になってくる。どちらかというとアンダーユースである。20世紀まではオーバーユースの話がずっと続いていて、アンダーユースになったのが最近。

それに関連して第二章第一節に「自然を支配の対象にしてきた。でも京都は支配の対象にしていなくて、自然との共生を体現できている」といった表現がある。確かにそうではあるが、京都でも体現できていない部分はかなりある。

例えば明治時代、三山ははげ山であったし、友禅流しによって川を汚していた。巨椋池も埋めてしまった。うまくいかなかった部分も多々ある中で、もう少し丁寧な表現ができると良いのではないかな。

プラー委員

文章としてはとても難しいが、大変良い文章だと思った。本文中に、海外、国際、国籍に関係なくというような言葉がたくさん出てきて、良い文章だと思った。

様々な人が自分ごとの課題として考えていかなければいけない時に、多くの人が読みやすいような別のバージョンを準備できれば良いのではないだろうか。イメージ的には、海外の人も読みやすく、小学6年生や中学1、2年生くらいの人たちが読めるようなものである。本文案をこれ以上易しくするのは難しいと思うため、別のものを製作することを考えるべきではないか。それによって皆が読めるものになり、自分たちの課題であることを意識できる。国籍に関係なく、そのように感じてもらえるのではないかな。

宗田会長

観光のマナーの話も、本質は、京都に来た旅人が京都のより深い魅力を知ること、帰った後に、学んだことや体験したことによって自分の暮らしが変わる。長期ビジョンから学び取ることによって、地域のくらしぶりや文化を変え、意識改革する。京都の生き方、考え方、めざすべきものが分かりやすい表現で、海外の方に伝わると良いということだろうか。

プラー委員

そうである。若い人たちが現時点でも読むことができるようなものになれば、25年後に35歳、40歳になった時に、その内容を展開することができるのではないかな。

小川委員

今の点に関して私も同じことを思ったので発言する。私の所属している立命館大学でも、憲章を新しく作り直すというミッションが現在進行している。野村特別委員が執筆された非常に格調高い文章は、私はとても好きなのだが、一方で、外国人や小中学生の方にも広く読んでもらうことを踏まえると、やさしい言葉で言い換えるというより、この格調高い文章とは別でその内容を説明するものを作成すると良いのでは。言葉を易しくするよりも、「ここは京都のこういうことについて語っています」「こういった問題について考えています」と説明する、細かく仕分けるような感じで作成すると良いのではないかな。

安保副会長

一般の市民が長期ビジョンについて、時間をかけて読んでくれるかはわからない。最初のつかみとして、短時間で読めて取っ付きやすいやさしい版は、どの人にとっても必要ではないか。ただ子ども向けだからやさしくするということは子どもに失礼で、子どもたちのほうが勉強する意欲に燃えているので、少し解説というか、絵を足すといった工夫をすれば、読んでくれるのではないかと思っている。

非常に格調も高く、私もこのような文章が書ければなと思うほど。日常で使っていなかったが、このような言葉を使うことで、自分の気持ちやいろいろなことを巻き込んで、それがつながる形で続いていくことが分かるな、と感心をしているところだ。

ただ、少し言葉の使い方が難しいところもある。例えば、第四章第三節(3)の「障害児教育」について。今はインクルージョンという概念で、誰もが同じ学校、教育で、障害の有無にかかわらず必要な支援を受けて教育を受けることを意味している。ライトハウスの表現にしても、もう少し広い意味だったと思う。障害児教育と限定してしまわずに、それぞれ言葉の意味などは、今、広く捉えているところは、広くするようにしたほうがいいかと思う。

宗田会長

インクルーシブについては、エクイティなど、様々に尊重される概念がある中で重要なポイントである。もちろん障害もLGBTQもそうであり、最近はその種の議論が盛んになってきている。

先日の教皇選挙でのステートメント。最初、生で聞いた時は意味が取りにくかったが、その後教皇庁が発信した文章はきれいにまとめて奥深く、平和へのメッセージが平易な文章になり、すばらしいと思った。ローマに匹敵するまち京都でありたい。

松井委員

この文章を読んで、「私は京都が好きだ」と漠然と思っていた人も、自分を見つめ直す機会になるかもしれない。様々な分野において専門の先生方がおられ、「これはもう少しこうやってほしい」「ああやってほしい」という御意見があると思うが、これから修正をしていただければと思う。

誰に読ませるのか、人々がそれをどのように利用するのか。例えば、行政の皆さんがこれを読んだ時には、様々な施策を考える中で立ち返る場所、立ち戻る、そのような指針としてとても良い文章だと思った。25年後、50年後も変わらないだろう。100年前も同じことを考えていたのではないかというような内容なので、変わらないために我々市民がどうすれば良いのか。

これだけの文章を30分ほどかけて読んだ。自分の心に引っ掛かるところはいくつかあるし、理解が難しいところもある。先ほど御指摘があった植物と環境の課題についてはよく分からないけれども、よく分からない部分を、例え

ば、教会の神父が聖書の一節を引用して「実はこれはこういう意味ですよ」と解説するように、必要な年代の人たちに解説するような使い方、バイブルのような使い方もできるのではないかと思った。

鈴鹿委員

行政文書として格調ありながらも非常に読みやすかった。特に、第二章はうまく具体例が書かれているので、京都のまちの情景が目浮かぶようで、読み物としても楽しめると思った。

伝達をするという観点で言うと、同年代や下の年齢の方々と話していると、行政文書は硬いからA Iを使って全て要約させるという話を聞く。25年後はA Iの活用もどんどん進んでいき、これからの子どもたちは、興味を持ったから実際に読む前に、まずA Iで要約して本当に興味のある内容かを確認してから読むこともあるだろう。この本文案も一度A Iで要約してみたらどうか。

第三章第一節の最終段落の「2025年現在においてはこれらへの反発が顕在化しつつもある」について。10年くらいたった時にこれを見て「反発とは何だろう」とならないだろうか。具体例を書く必要はないと思うが、初めて読んだ際、ここまでスムーズに読めた中で、少し引っ掛かりを覚えた。

第三章第二節「海外からの観光客が大幅に増加しており、宿泊業をはじめとする幅広い産業に好影響を与えている」について。プラス面として海外からの観光客、マイナス面として交通の混雑と記載されているが、京都の昔からの産業は、実はインバウンドによって経済的にも打撃を受けている。新しい海外からの人の目を引くようなところに行かれ、従来のところに来られない方が増え、売上が下がっている話ばかり聞く。そのため、観光業はこんなに潤っていたのか、という印象となるのは現実とは異なると思う。

第四章第二節（1）「世界の文化と交流し」について、内容は良いことが書いてあるが、対象者が、突き抜けた人材に特化されていると、厳選された人だけなのかと印象を受ける。ふらっと来られた旅人も留学生も文化に含まれるので、柔らかに包括的になれば良い。

宗田会長

観光の観点なども非常に重要な御指摘である。また、先ほどの松井委員の発言にもあったように、解説をする人たちがそれを正しく読みこなしていくことも、一つ重要なことだろう。

杉田委員

様々なコミュニティに向けて、様々なバージョンの説明があってもいいのではないかと。例えば、日本国憲法について、大阪のおばちゃん語訳版やアーティストによる解説本が出ており、大好きでシリーズで集めている。いろいろな属性の人にこの文章を渡した時に、彼らがどのように自分たちのものにしていくのかというプロセスにまで、想像力を働かせられるとおもしろい。結びに

については、将来小学生が学校で使うようにというシーンを語られていたのがすばらしい。誰に届けているのかの言及が序文にもあって良い。可変して良い、自分たちの言葉にして良いフレキシブルさがあっても良い。

特設サイト等が集まった意見結果についてなかなか言及されないが、第三章第二節「京都市の今」において京都市の現状が書かれているが、そこに意見結果ももう少し盛り込まれると良いのでは。

私は「大正時代のお悩み相談」という本が大好きでよく読んでいる。大正時代の新聞に掲載されていた、市民からのお悩みコーナーに編集者が回答しているものを集めた本である。時代が変わっても同じようなことで悩んでいることもあれば、社会の変化を感じられるような、ハッとさせられる悩みや将来への希望もあると思う。長期ビジョンにも、今の時代の市民たちが何に希望を抱き、何に不満を感じているのかも、データとして盛り込むと良さそうだ。

阪部委員

この文体に関しては野村特別委員の個性が感じられて、とても凛とした雰囲気が良いなと思っている。

序文に3つのテーマがあり、1つ目が「歴史と文化を介して人間性を回復できるまち」、2つ目が「自然への畏敬と感謝を抱けるまち」、3つ目が「自他の生を共に肯定し尊重し合えるまち」である。この3つのテーマの順序で記載されているが、本文案では若干順序が入れ替わっている点が気になった。

野村特別委員

どういうわけか見落としていたので修正する。恐らく序文の入れ替えの過程で生じたものだが、対応を考えたい。今回は本文をかなりの期間寝ずに書いていたため、序文に戻る余裕がなかったのが正直なところである。失礼した。

原委員

審議会での皆さんの発言を、とても良くまとめられていると思う。これでもう完璧だとは思っている。

製本される時にいろいろな人が見ると思うが、文字サイズをできるだけ大きくしてほしい。また、これは万人が見られるので、本文の抜粋版のような、これ一つで内容が分かるというものがあれば、なおありがたいと思う。

宗田会長

この間、日本人の平均年齢も上がってきて、高齢社会になり、新聞の字も文庫本の字もどんどん大きくなっていくので、そこをあえて小さくするようなことをしないでいただきたいということは、私も高齢者になっているのでお願いしたい。

野村特別委員

事務局と相談をするが、前回の審議会も含めて今お話が出ているのが、事例集やデータ集、あとは脚注をもう少し説明する文章の追加である。杉田委員の御指摘は本当にごもっともで、非二元論的だと言っておきながら二元論的に書いてしまっていることはかなり自覚している。内容がそもそも概念的なので分かりやすく書かなければいけないという、人文系の研究者の端くれとしてはとても胸が痛い、むしろ今の御指摘を踏まえて、脚注なのか、他の資料には細かく書き切りたいという気持ちは強く持っている。

原委員からあったように、前々回も御指摘があったが、抜粋版や、もしくはブラー委員からお話があったような、もっと分かりやすいもの、それこそ2～3ページでというのは、いろいろな自治体さんがやっている取組だと思うので、よいのではないかと思っている。時間やプロセスの関係でどこまでやれるのかは事務局と御相談だが、僕としては非常に重要な御指摘として受け止めている。

宗田会長

文学的な、京都的な感性は、削ぎ落として残ったところだけで深く意味が通じる。なにもないくらい削ぎ落としたものが幽玄の世界、能の表現という価値観も京都にはある。詳しく書いて読んでもらおうというのはありつつ、京都らしさは削ぎ落とした形であると、金剛の宗家に諭された。

赤松委員

「学藝」を盛り込む。大学のまち、芸術のまちであることがこの二文字に含まれ、想像ができることは大変ありがたい。学びや学藝が、第四章第三節(2)で「夢中」と「感動」に溢れ、学び続けられる」、一生涯、学び続けられるまちであるということで取り上げられており良いと思う。

第四章第三節(3)の「ひとりひとりの個性や価値観を尊重し合える」について。今の世の中で、どこも互いに思いやり理解しようとする、それから個性や価値を尊重し合える、自分の居場所等で場を見つけてといったところは、京都らしいのではないか。昨今どこでもあちこちで起こっている事件。本当にいろんなところで起こるので、心を痛めてしまって、現在こんなに孤立や孤独に悩んで、誰からも疎遠になる。事件を起こすに至る精神性は、今のひとつの特徴。京都はそうさせないまち、そういう人々がそうならないようにセーフティネットワークが開かれているまちということだと思うが、今の世の中の変わり様や事件のスピードを見ていると、全部言わないという京都的であるべきだが、もう少しお節介さが伝わる、これからの子どもたちに、そっとしておく、お互いを尊重することは誰かを阻害していることだと分かってもらう必要がある。

障害児教育について、進んでいるとの記載は引っ掛かる。日本は世界に後れをとっていることは事実。その視点も添えていただきたい。

宗田会長

京都はアール・ブリュットというアートを生かした取組もある。まちなかにアート関係の方が職人さんも含めてたくさんいる。誰一人取り残さない社会をつくるためのひとつの取組であるだろう。

濱崎委員

京都のまちなちのにおいのようなものが全体として感じられた。同時に筋の通った論理性もある。芯が通っていることが安心感や心地よさにつながるのは、まちも文章も同じ。読んだ方に実感として伝われば良いと思う。

目次を見ると言いたいことが分かる点が非常に良いと思っている。一方で、少し不安に思う言葉がたくさんあった。言葉や使い方の練り上げをお願いしたい。チャンスがあれば、私が感じたことを事務局へお伝えしたい。

何度も出てくるキーワードがたくさんある。例えば、「奥行き」「つながり」など。重要なことが、重層的にあることによって、その奥行きやにおいのようなものが伝わる効果がある一方で、少し繰り返しが多いのではないか。そこは整理していただければと思う。また、繰り返しが良い効果を生んでいない要因の一つとして、キーワードの意味が定義されていない点がある。例えば、「節度と矜持」というキーワードがたくさん出てくる中で、第二章第三節「分野を超えた敬意と、自分の領分を安直に超えない節度」と記載がある。この箇所は定義をしているわけではないが、人によっては定義と受け取られる可能性があり、この表現で良いのかと思う。この文章の中で定義を記載するのが良いかどうかは別として、どのような意味で用いているかについては、はっきりしておく必要があると思う。そういった点がいくつもある。例えば、「理想」というキーワードはこの文章の中で非常に強いと思うが、後半に登場する「理想」が、そこまでに出てきたどの「理想」と関わっているのかと考えてしまう。意図的かもしれないが、この網の目のような重なり合いが若干ずれている部分もあるのではないかと思う。今後、うまく整理ができればと思う。

目次を見て言いたいことが分かれると発言したが、非常に重要なキーワードである「居場所と出番」、「学藝」といった言葉が目次にはない。目次に登場しても良いのでは。

章立ての順番について。第四章が今言いたいことだと思うし、第四章のところで「学藝」など様々なキーワードが出てくる。それらのキーワードは唐突に思えてしまう原因の一つが、後半になって出てくるからかもしれない。例えば、第二章と第四章を最初に持ってきて、背景部分である第一章、第三章を最後に持っていくのはどうだろうか。行政の立ち位置や背景というのは必要なことではあるが、市民にとってはどこまで必要か。大事なところが読まれずに終わってしまう可能性があり、もったいない。「京都はこうありたいよね」「これは普遍的だよね」など、言いたいことを最初に持ってくることを検討いただくのも良いだろう。

野村特別委員

キーワードの繰り返しの用法やこの範囲の重複もしくはまさにおっしゃるとおりで、非常に痛切に感じていたが、申し上げてしまうと、事務局がきちんと時間をくれなかった。ただ事務局の皆さんはとても頑張ってくださっている。事務局が悪いという意味ではなく、時差もあり、平日も日中は全て詰まっている中で、修正を3日後に出すといったことがあったりした。それは仕方がない不可抗力だが、ごもつともである。

まさに、つながりや重なりといったことは、何のつながりで、重なりで、それは何なのかといったことを、特に第四章、第五章は事務局から出してもらったものを抜本的に僕が書き換える形で、かなり無理して前段と整合性を合わせた。第一章、第二章はほぼ一言一句を僕が書いたものだが、定義はそれでも弱いと思っていて、御指摘は本当にごもつともである。これは責任を持ってやりたいと思っている。

章立ての件も、まさにごもつともである。かなり前半の審議会で曾我副会長からも御指摘があったように記憶しているので、事務局とも相談をしたい。人によるとは思うけれども、何を読まされているのか、と思われる可能性もある。あるいは抜粋版や別の分かりやすい版など、いろいろな形でフォローができるのかもしれない。

一点だけ御参考に委員の皆様にも、例えばだが、この文章全体を通して「京都」という表現は使わないようにしていて、「京都市民」に統一している。あとは「京都市」というのは、第二章で歴史の話をする時、京都市の成立過程に触れた時に、要するに「京都市なる体制が成立してから」と「それ以前」とを、貫名委員の御指摘を踏まえて、「京都市」と「このまち」として書き分けている。つまり「このまち」というのは京都市の成立以前からの歴史等々を引き受けるものを意味している。本来ならば本当に一言一句このような定義を厳密にして、論理的にも整合的に、かつ構成としても対応する形で書かねばと思いつつ、議会日程等があると聞いているのと、僕はアメリカに明日戻って、また引っ越してこちらに戻ってくるスケジュールのため、パブリック・コメントを受けながらの修正過程でも可能な限り修正したいと思っている。

高屋委員

高齢者にとっては、片仮名言葉が少ないのが非常に読みやすい。これは非常に大事なことで、高齢の方々は、新聞を見ても何を見ても横文字に対して非常にアレルギーを持っている方が多い。

「心のお土居」など、京都に住んでいたら京都の味が分かってくる。野村特別委員も、このように京都の方と付き合っている中で体の中で醸成され、この文章に表れていることが嬉しい。

本文中には町内会で自治会のことを語っている。自治会という言葉は出てこないがそれはそれで良い。また、福祉という言葉も出てこない。あえて福祉というのは入れなかったのかと思う。福祉の「福」という字は、神様からもらっ

た宝物という字である。御存じの方がたくさんいると思うが、幸福の福というのは出てくるけれども、福祉というのもどこかに使ってもらえると嬉しい。

野村特別委員

僕自身はとても使いたいと思っている。決して事務局に止められたわけではない。作成および修正過程において、その言葉がわりと、具体的な話になってしまっていた。むしろ明示的に用いたいと思う。

宗田会長

ウェルビーイングやウェルフェアというもっと広い概念、みんなが幸せになるより良い生き方。してもらいよりもしてあげる喜びが根底にあり、それが自然に出る概念という、福祉よりもひとつ上の概念を書こうとしていると感じる。福祉と言わなくてもそれが、当たり前前に市民ひとりひとりができるようにしたい。

野村特別委員

おっしゃるとおり。「福祉」という言葉を使いたくないと思ったことは全くない。むしろ使いたいと思う。宗田会長がおっしゃったように、恐らく抽象化および具体化されてしまった中で、たまたまその語が今は具体で入っていないという状況なので、御指摘を踏まえて盛り込むようにしたい。

小川委員

濱崎委員の発言に関連し、第四章の冒頭の書き出しが唐突ではないかというのが、私も唯一気になった点。「学藝のまちである」、「学生がたくさんいるまちである」という話は、第四章の冒頭よりは、何か節を設けて別の話として入れても良いのではないか。芸能や伝統のようなものが、全般的に過去の遺産、先人の遺産として、京都においては非常に大事であると思っているものの、少し強調され過ぎているように思う。イノベーションや新しいテクノロジーの開発も重要ではないか。テクノロジーは脅威であるだけでなく、私たち自身がこの環境の問題や、京都が先進的な都市として発信していく場所でもあると思う。そういった意味で、学生たちがたくさん集っているという京都の特色を、第四章の別の項目として入れても良いのではないかと思った。冒頭が各節をすべて総合しているか疑問である。ただ「矜持と節度を持って」という表現はとても良いと思っているので、そことの兼ね合いを考えていただきつつ、文化や芸能、伝統、自然、人間ということだけに偏らず、工学系や企業の人たちにも刺さる話も入れてもいいのではないかと思った。

やさしい版を作成する際の参考に紹介したいのだが、「LLマンガ」という障害者や移民の人たち向けの漫画がある。大人の漫画をやさしい言葉に書き換えたものではなく、リテラシーが分からない人、文脈が分からない人たちのための漫画である。例えば、マスの枠線が四角から急に三角になったり、吹き

出しが飛び出したり、過去の話や未来の話に文脈が変わることなど、リテラシーを持っている人にとっては当たり前に理解できることを、LLマンガでは、あえてマスは全て同じ四角にしたり、過去に飛ぶ時には「ここから過去の話です」「ここからは宣言の話をしていますが、ここは具体例です」といったことを分かるように作成する。この基本構想とは別にやさしい版をつくる時には、文言の格調高さを減らすのではなく「ここは少し含蓄のある話ですよ」「ここは直接的な事例を言っていますよ」ということを分かりやすくする工夫が必要ではないかと思っている。

藤野委員

福富委員や鈴鹿委員と全く同じことを思った。繰り返しにはなるが、客観性を高める意図から、あえて発言させていただきたい。

やはり「精神疾患の増加」という文言には引っ掛かった。社会的文脈で捉えるべき問題を病理化するような見方には、違和感を持った。

2025年現在においては、SDGsやDEIの反発が顕在化しつつあることは、現時点のことであるとともに、反発に対する、逆反発も一部で起こっており、このような単純な捉え方で良いのかにも違和感があった。

また、第三章第一節「デジタル化によって雇用の流動性が高まり、転職・副業の一般化や、女性の社会進出が進展した一方で」について、雇用の流動性は、デジタル化のみならず、様々な要因において高まってきた。また、雇用の流動性といえばこれまでの日本では、女性等の非正規雇用増加による不安定雇用の拡大といったネガティブな側面と結びついて語られることが多かったと思うので、女性の社会進出の進展というポジティブな文脈で語られている点に引っ掛かった。

さらに結びの「心から祈念したい」について、この文章の主語は誰なのだろうか。明示されていないので気になった。松井市長がおっしゃった、草案を出された方の個性が見えるということであれば、主語は野村特別委員なのだろうか。

野村特別委員

極めて聡明な御指摘である。唯一、自然に筆が流れていった中で、僕が主語の文章が出てきてしまったのだが、それが先週の頭に熱が38度8分あり、後で考えなければと思っていて、そのままになっていた。申し訳ない。おっしゃるとおり、これを書いた瞬間においては、一文くらい執筆者が主語の言葉があってもいいかと思っていたのだが、教条的でドグマティックかとも思っていた。今読むと、主語を明示していないのは望ましくなく、文意としても不適切だと思われるので、再考したい。

曾我副会長

3点申し上げる。

1点目。長期ビジョンは、基本構想と基本計画を合わせたものを作るのだとこれまで思っていた。第四章が今から何を取り組んでいくかということなので、第四章が基本計画に相当する部分なのだろう。もちろん基本計画単体で作っている時に比べれば、ボリューム的にも減ったものになるだろうと思っていたが、具体的に何をやっていくかが分からない。計画的なものは一切抜くのだということであるならばこのような形になるのかと思うが、しかし、あまりに何をやるのかが見えない。例えば、第四章第一節で「自然と関わり続ける」「共存し続ける」とあるが、これは、この後どんどん暑くなっていくけれども、京都の皆さんは暑いのを我慢すれば良いということの意味しているのか。それとも、地球温暖化に対して何か取組を実施することを意味しているのか。具体的に温暖化をどうしていこうとするのか。課題に対してどのような方向を向いていくかが分からない。そういったものはもう抜きだと言うのであれば、それはそれで良いが、その理解で良いか。

2点目。京都市職員はどこまでこれを作るプロセスに参加されているのか。それぞれの政策を担当している各部局は、どう考えているのか。ボトムアップのようなプロセスがあり、その結果最終的に執筆されるのが野村特別委員であることは問題ない。審議会委員がそれに対して意見を言うという形で良いと思うが、職員も参加するものではないのか。ここで書かれているものは、京都市で、京都市民のことだというのはそのとおりだと思うが、職員は京都市民ではないのか。ここで定義されているような広い意味で京都に関わる人たち、京都を愛する人たちの最たるものとして、職員こそが一番課題を認識しているプロフェッショナルであり、どうしなければいけないかを理解しているはずだが、どのようにそれを盛り込もうとしているのか。

3点目。「問い続ける」ことについて。「これを考えましょう」というよりは、まず「自分たちはこういうことをやります」と言っただけで、それで「どう思いますか」と言うほうが、「問い続ける」だと思う。第五章でも、いきなり市民の範囲を広げるような表現が登場するが、まず市民や職員がどのような形で今後取り組んでいくかが重要。参加の仕組みをどのように作っていくのかについての記述は、とても抽象度が高い。これをどのように具体化していくのか。どのような形で、施策のところまで持っていくのか。どのように進捗管理や評価をするのか。見直す必要があった場合、その見直しのプロセスをどうするか。そのあたりの記載がない。問い続けるためには仕組みがやはり必要である。仕組みをどうするか記載がないと、書いて終わりになってしまうのではないと思う。

松井市長

一番本質的な指摘だと思うので、私から説明したい。私は初めから基本計画を策定するつもりは全くない。第1回審議会の挨拶の時から申し上げているが、計画をつくる時代ではない。25年間の基本計画を策定するのは無理がある。今議論いただいているのは基本構想だと考えている。「長期ビジョン」と

言うよりは「構想」の方が好みだが、名称については皆様で議論いただきたい。ある種の価値観を提示したいし、審議会にお願いしたいというのが基本。議論いただいているのは、基本計画ではないため、これについてK P Iを設けるつもりはない。行政計画、あるいは私の任期中に何をするかについて、長期ビジョンの価値観を大切に、行政の舵取りをしたいと思っている。平田オリザ特別顧問に、ビジョンに何を書くべきかと聞いたところ、「これからの京都のまち柄というものを示して欲しい。それを受けて行政は、市会はどう動くのか。」と言われた。また、曾我副会長がおっしゃる新たな時代の市民参加の在り方、従来の選挙、二元代表制だけでなく、例えば、地域コミュニティをどう守っていくのか、地域以外の京都のまちの全世帯に広がるテーマ型のコミュニティをどうつくるのか、人々の京都への愛着をどう受け止めていくのか、掘り起こしていくのかという価値を提示していただきたいというのが基本的な考え方。

職員の関わりについては、審議会で議論した価値観を反映した序文を示して、問い掛けてはいる。しかし、この手の文章を作成するというときに、従来は審議会や行政でやってきていることではあるが、行政職員が文章をつくるという建て付けにしていないのは、私の意思。平田オリザ特別顧問は課題があつてどうするとかではなく、こういう課題があるけど皆さんならどうするか、と投げかけると言われたが、流石にそれは違うと思った。25年後に向けて大切にする価値について、審議会の皆さんに提示してもらって、それを受け止めながら、構想を作っていく。問うべきは、具体的な行政計画ではなく、我々が重視すべき価値、価値観だと思っている。そういう意味で、もう少し整理すべきというのはある。今の時代、京都ならではの福祉の在り方、ウェルビーイングというのは行政計画の中で指標を設けてしっかり考えないといけないが、誰かが施しを与えて、誰かが受け手というのではなく、交換可能な立場にありながら、自分のことだけでなく他者のことを考える。そして地域、場の多幸感をどう高めていくか、様々な課題をどう克服していくのか。21世紀の4分の1が過ぎたところから、21世紀の中葉にかけて、どういう福祉地図を掲げないといけないのか、アウトラインを明確にしなければならない。

「学藝」という言葉をハイライトしてほしいと言ったのは私。ここでの学藝は文芸的なものだけでなく、I V Sのような京都的なブレイクスルーの根源のようなものを含めている。私は京都ならではの人間関係の粗密の塩梅を大切にしたい。京都の「いけず」は、歴史がつくりあげた人間関係である。密がいいのか、疎がいいのか、その塩梅。コミュニティや老舗といわれるファンをもつなりわいなど、京都的な何かに対し、時代が何を求めているのかを考えていきたい。匠、お豆腐屋さんの文化をどう残していくのか。個人的ななりわいのなかで、職人文化が生きている。町内会も京都ならではの形で生きている。これを25年後にどうつないでいくのか、どう生かしていくのか、大学を組み入れていくのか、海外の人をどう混ぜていくのか。京都のコミュニティの在り方、分野ごとの在り方、家元、師匠、ファンをどう大切にするか。まち柄を提示し

ていただきたいし、その中で行政や議会が何をするのかは、分野別の計画の中で考えなければならない。25年間の計画策定は無理であり、むしろ大切にしないといけないのはまち柄である。私の思いはそうだが、審議会の中で具体性がなければならないという議論であれば検討はしたいが、様々な計画がある中で、25年スパンのものはある程度包摂的、理念的であってほしい。例えば、京都のすごく良い塩梅の人間の関係性。地方のような密過ぎる人間関係は144万人のまちではあり得ないが、誰かが誰かを知っている、というまちの連なりを許容するような文化、場の空気というのを表すために、どう書くか。「学藝の府」は唐突ではあるが、京都には日本中にファンがいて成り立っており、そういう本質をどう維持するか、まち柄について書き込んでほしいと思っている。先ほどの議論を聞いて、もう少しパッションの部分入れて良いのではないかと思った。伝統文化、職人芸、匠の技だけでなく、京都のなりわいまで含めたまち柄、その本質を問い掛けていただくことを期待している。

曾我副会長

そんなに食い違っているわけではなく、もう少し具体性が必要なのではないかということだ。市長がおっしゃった話がもう少し盛り込まれるべきではないか。第四章のボリュームがもう少しあってもいいのではないか。策定方針にあるように長期ビジョンは基本構想と基本計画を統合するという表現をずっと使っているが、基本構想と基本計画を統合するというよりは、基本計画を廃止するということならば、そのことが、もう少し明確に出たら良いのではないか。基本構想策定の義務がなくなり、自治体に委ねられるようになったが、京都は基本構想に重点を置き、その後の具体化の部分を分けていくという形をとることを問い掛ける意味はもちろんある。それであれば、なおさらどのように具体化していくかという道筋が入ってこなければ、第五章が宙に浮いてしまうことが危惧される。だから、そこをつなぐ部分とセットにしつつ、まち柄をもう少し詳しく描いているようなものを作り出していくのが望ましいのではないか。

松井市長

少なくとも市長は4年の任期であるので、それを超えて将来を縛るようなものは正直に言うとなかなか難しい。民主主義のもとで、ある時の知事や市長が大きな10年計画を作ることは、今の民主制においてはやや不遜である。ただ、このような議論を総合計画審議会において、まち柄をつくるという、この部分の理念というのは、私はあっていいと思っている。今の民主制の中で言うと、市長が大きな構想の中で何をやるかということは、それぞれの選挙で問い掛けて、市民の付託を得てやるべきではないか。従って、その総合計画のような長い期間のものを、どこまで今の民主制の中で我々が描けるのかということと、具体的な総合計画性というのは、なかなか難しいことだ。

私は、自分の任期の中でこの議論と並行しながら新京都戦略を策定し、議会でも議論していただいた。私が次の選挙に出るとすれば、当然のことながら市

民によって評価され、その時に審判の対象になるようなものだろう。この場では、そこを超えた大きな価値を皆さんに議論をしていただくとありがたい。私の話したような思いをもう少し書き込むべき、説明したほうが良い、理念的で先の姿が見えないということであれば議論いただきたい。

宗田会長

理念をどう書けば、具体的かつわかりやすくなるかという点については、我々もそれぞれの専門分野を持っているので、責任を持って果たしたい。3ページの第一章第三節の最後の一文は、計画の在り方そのもの見直して、どう継承していくかということ。統合という言葉で表せない部分、理念に立ち返って、世界、人類に問い掛けるものであってほしい。理念を掲げた以上、それを具体化するための知恵を絞らないといけない。「市長が市民のしもべ」という表現は極端だが、みんなの力で市長を支えるという、わたしたち京都市民という役割を果たすことをもう少し盛り込んでもいいのでは。

西田戦略監

職員が関わったプロセスについて補足する。第四章は、政策分野と結びつくところと認識しており、できるだけ価値観を明示するものとするなかで、それぞれの分野別計画に紐づいているという視点は持つ必要があるので、素案は事務局で作った。御指摘いただいた趣旨は理解したうえで、分野別計画に結びつけていくために、それぞれの分野で大切にしている言葉、価値観をしっかりと意識したところ。引き続き、書きぶりについては庁内で議論もしていき、分野別計画に理念をつなげていく。

松井市長

長期ビジョンはあくまでも総合計画審議会の文章だと思う。起草者の個性や文体はできるだけ尊重したほうが良いと思うが、最終的にこの文章が誰かへの問い掛けであれば、起草者一同、この審議会として、このような方々に対して問い掛けをしていることになる。これは行政文書でもあるので、審議会の意向として決定し、それを市会でも問い掛けて基本構想となる。

野村特別委員

全く他意なく全体の話として、予防線と言うと大変お恥ずかしいのだが、再修正に先立って一点申し上げておきたい。2月に2万字を書き、ある程度は緻密に定義もロジックも立てられていた自信があった。その後、新たに事務局の皆様から、特に第三、四、五章はほぼこれを盛り込もうという形で文案をいただいて、僕のほうで日本語にした経緯がある。全てを本当に盛り込もうとなると、3万字を優に超えてしまうだろうと思う。

また、僕自身も5年弱だが元々経産省にいた関係で、かつ委員の皆様方の御理解のところだと思うが、やはり政策に紐付けていくことを、つまり、政策の

ある種の土台というか、まさに理念的な支柱となるであろうものとする、今日も冒頭に申し上げたとおり、どうしても論理の飛躍や、ある種かいつまんで単語を入れることが不可避なところがある。

市長もちろん、事務局の皆さんも、僕も、本当に可能な限りは御意見を反映したいと思っているけれども、どこまでかというのが、もはや文量を含めて、読み手の方々がどういった印象を受けるかによる。もう既に閾値を超えてしまっている印象を僕は持っているため、少しやり方を考えなければならないと思っている。

宗田会長

第四章の文頭は、崇高な理念であり理想そのもの。どう具体にするのか、本当にできるのだろうかという気持ちもあるし、曾我副会長の御意見もわかる。

松井市長

個別の具体論が総論をリードするのは、あってはならないと思う。ただ総論を御理解いただけるならば、それぞれの分野でのマイスターや匠、素晴らしい先生、そういった人たちをいかに応援するか、いかに死に絶えさせないかというのは、地域コミュニティだけではできない。どのような仕組みを作るか、それは一番やりがいのある課題である。それぞれの分野の家元、お師匠さんのような方々が、京都にはたくさんいる。どのようにして次の時代につないでいくか。元学区ごとの地域コミュニティとテーマごとのコミュニティをどう縦横結びつけるか、どういう形でやるか、知恵を巡らせるか。明治の初期に、京都の人々は様々な形でリージョナルコミュニティを再編した。今、私たちが取り組むべきはそこだと思っている。

宗田会長

地縁、機能社会をどう組織化するか、人々の思いを体系化、組織化してエネルギーにしていくか。地域に任せると言いながら決断を投げていた部分が行政側にあったし、それでは社会は変わらないし、どう連携して、効果的な働きをしていくかということだと思う。

理念を共有することで力を合わせることができ、そのような計画があるべきである。また、計画の内容に縛られることなく、時代に応じて変化していくこともあるだろう。

小川委員

先ほど、第四章の冒頭が唐突ではないかと発言したが、「学府」に伝統工芸や市民の人々そのものが含まれていることは、私もそのとおりに思っている。第四章の中に「市民がめざすまち」があり、第二節（２）「本物（ほんまもん）を追究、創造し続ける」に学問について記載があるが、大学がたくさんある点も、違う項目として書いていただいても良いのではないかな。

まち柄という意味では、書かれたものが既に十分に伝わっていると思う。京都が目先のものにすぐ飛び付かず、本当に「矜持と節度」を持って、何を受け入れ、受け入れないのかを選択することが重要ではないかと思っている。不便さをすべて解消して、全てのことをオールマイティーに改善すると書くと、京都のまち柄はなくなっていくのではないか。そのような意味で、京都がなぜこのように成り立ってきて、これからどう進んでいくのかという、骨格が描かれていると思っている。

鈴鹿委員

2点申し上げる。

1点目。「学藝」について。学藝が、いわゆる家元といったところにつながるという認識がなかったので、書き方を工夫してほしい。学藝というと、どうしても大学のことなどばかりに思ってしまう。これは素人がそう思ってしまったので、家元などの文化を含むことは、何らかの言葉で入ったほうが良いだろう。

2点目。全体の中に、情景が浮かぶように具体例が記載されている。様々な区が含まれているが、伏見区が一切入っていない。例えば、伏見区の方が読んだ時に、他の区は全て出てくるのに自分の地域がどこも出てこないのは、少し寂しいのではないかと思う。日本酒も無形文化遺産になっているので、一言、お酒というものを例示か、何か情景として記載があればと思う。

野村特別委員

3日前にも増田徳兵衛商店さんにお伺いした。日本にいる間はそれこそ毎月のようにお邪魔しているのだが、なぜお酒のことに一言も触れなかったのか、我ながらびっくりしている。書き方を考えたいと思う。

鈴鹿委員の1点目のご指摘の家元等を含むというのは、まさに伝わりにくかったのは僕の書きぶりの問題であり、失礼をした。なお、市長からもこの点は明示的にお話をしていただいたのにもかかわらず、書き切れていなかった部分もある。

8ページの三行目だが「真理の探究や伝統の継承、創造に挑む人々の生きざま」の后者、「伝統の継承、創造に挑む人々」と、9ページ目に「加えて、このまちで学藝を直接的に担う師や匠といった人々を」と一応書いてはある。これは、書いてあるではないか、という主張ではなく、お家元などと個別に書くと、そうではない人たちとの分断がかなり強調されると思い、その上であえてこの8ページと9ページで表現を変えて書いた。いずれにせよ、御指摘を踏まえて修正したい。これはとてもありがたいお話で、僕なりにいろいろな文脈で御意向や御意見を交ぜ合わせて書いているものの、読み手に伝わらなければ意味がないので、伝わらないという御意見も歓迎している。

鈴鹿委員

読み進めていくことで内容を理解できるが、第四章の冒頭だけを見て、それがくみ取れない。学藝という言葉に私が引っ張られ過ぎているのかもしれないが、普段使わない言葉なので、それが出てくると学問のほうだと思ってしまう。文化の文脈には少しピンと来なかった。

宗田会長

赤松委員はここで学者と芸術家を扱ってくれている、併せて職人さんのこともおっしゃった。解説するものがあればいいのだろうか。

白足袋という言い方がある。政治的な権力者ではないものの、文化や伝統において影響力を持つ人々である。独特な京都にある白足袋族を総称して、学藝と呼んでいる。

松井市長

白足袋だけではない。私の頭の中での学藝は、テーマコミュニティである。京都の町衆や地域コミュニティが京都を支えてきたのは事実だと思う。リージョナルコミュニティ、地域コミュニティの構成員が市民である。市民以外の京都に対するいろいろな愛情や憧れを持っている人たちが世界中にいる。

例えば、哲学を学ぶのであれば京都だと、世界中の人が思っている。お茶、京料理など京都には好きというテーマがたくさんある。京都愛というものをもっと磨けないか。そこをもっとつなげないか。そこがないので、やや唐突感があり「なぜ学藝なのか」となっている。そこで良い言葉がないので学藝という言葉を使っている。

宗田会長

学と藝を通じて、世界中の人々が皆仲間になれるというわけか。

松井市長

そうである。京都の人口が減少しても、京都ファン、京都学藝衆二千万人を誇るようなまち、京都をつくり続ける。必ずそれは人口減少に対する歯止めにもなる。

鈴鹿委員

おっしゃっている意味はとてもよく分かる。私が引っ掛かっているのは言葉のことで、学藝という言葉にそれが含まれるかということだ。茶道など「道」が付くものは、根本的に「藝」ではないと思ってしまっている。芸術やアーティストではない、でも学でもなく、文化というくくりでしか見たことがなかったので、違和感があるのだと思う。そこに芸術家の方が入るのは分かるが、そこに文化が入るのがピンと来なかった。「道」の部分をもどのように入れていくのかは結構難しいと思う。

松井市長

現代の地縁、志縁というものがある。志のつながりというものがあるが、もう少し様々な世界に広げたい。京都はお師匠さんがたくさんいて、その道ではとても憧れられている職人さんもおられる。そのような人のつながり、「連」というものをどうつくっていけるかという価値観は、私はとても大切だと思う。未来共創チーム会議でも議論いただいているが、住民だけではなく京都に対するファンがおられ、それをどう強めていくかである。

濱崎委員

私は「学藝」という言葉は逆に大事だと思っている。ただ、今回の記述においてはものすごく唐突だと思ったので、工夫は必要だと思った。

今、普段私たちが想像する学問や藝術は、ここ150年くらいの概念でしかないことが多い。それこそ二元論の議論に共通するかもしれないが、学びというものはもっと幅広いものであり、まち全体から学んでいただろうし、芸能からも学んでいただろう。近代以前は、藝という言葉はとても幅広く使われていたと思う。近代の教育もそうであるし、学問もそうであるし、産業もそうかもしれないが、京都の持つ、あるいは日本の持つ、曖昧なところもあるが非常に懐の深い、文化や藝術、学問のようなものを大事にしてきたという点が重要。京都の特徴を位置付けてきたのは、まさにその部分だと思う。それを「学藝」という言葉で表すことに、説明は必要かもしれないが、私はとても良い言葉だと思っている。

杉田委員

具体的に何をやっていくかの議論、アイデアをどうしていったら良いのか、皆さんに相談をしたい。長期ビジョンには文字量の制約があり、アイデアを全て含めることはできないと理解している。しかし、一生活者として、また都市計画を勉強してきた中で、毎日「こういうアクションをしたい」「次の政策計画ではこういった意見を言いたい」ということが毎回たくさんあるのだが、意見を言う場所がない。審議会委員の皆様は各分野の専門家であり、具体的な政策についてのアイデアもお持ちであると思う。そういった意見を言う場所、意見が残る場所がないことにフラストレーションを感じている。

未来共創チーム会議の議論の中でも、「こういうことをやりたいよね」「こういうアクションの方向性があるよね」と、これまでの経験や参照元、読んだ本、話した内容、そういった具体的な言葉がたくさん出てきた。しかし、その議論の結果はきれいにまとめられて審議会において提示される。そのようなものだと理解しているが、具体的な内容から抽象的な内容にまとめられたものを、政策や計画として職員の方が率先して読み解かれる際、大変労力がかかるであろうし、もったいないと思う。長期ビジョン考えるに当たって出てきた、具体的なアクションプランのアイデア、こうした政策があり得るのではないのかという議論も、議事録に漏らさずに残していただきたい。今後、具体的な計画を作

る際に、参考として立ち返ることができるような議事、議論をしていくことが、事務局のミッションなのではないか。

宗田会長

議事録は要約版だけではなく完全版も作成されている。ただ、議事録はなかなか読んでもらえないものだ。

様々な機会を得て言い続けることが重要。一回アイデア言っただけでは絶対に実現しないので、機会を見つけて、例えば、このような審議会や一般の市民の人々と話す時など、様々なところで言い続けていくと、少しずつその意見が広がっていく。また、市民公募委員として参画するなど地道な努力を、特に若い方には惜しまずにしていただければと思う。

野村特別委員

杉田委員のお話は、僕はもう全面的に賛成で、委員の皆様方をはじめ、とても良い議論をお時間を賜って織り成してきた中で、それがこの文章でいったん区切りを見るものの、そぎ落とされるものも無数にある。それをどうするのか。つまり、この文章とは別次元の話として、事務局の皆さんも一緒に何かをやっていけたらいいねという御趣旨ではないか。それはもうごもつともである。

貫名委員

学藝の話はとても面白くて、議論は非常に納得するところだった。現時点の文章を読んで、それが読んだ人に伝わるかという、全くもって伝わらないので工夫が必要。

学藝や文化を語る時に、けん引するような人がいるというのが今までの印象で、例えば、どの審議会でも同じ人が委員になっている、どの講演会でも同じ人が講演しているなど、人にスポットが当たってきたのがこれまでだと思う。しかし、今後も人にスポットを当て続けられるかどうかは疑問。人ではなくて場づくりのようなところにスポットを当てる。実力も運のうちと最近言われている。京都を選ぶというのは後天的にできる。京都を選ぶことでチャンスを掴めることができる。そこで何か得られるということ。

赤松委員

学藝について一言。私たちの分野は「創造に挑む人々」に含まれるが、京都では特に伝統の継承にアクセントつけて語られるように思う。実験や失敗を恐れず新しいものを生み出してきたというのが創造と学藝なのでそれが出てきたのは良かったかと思う。一方で、「ほんまもんを追究し、創造し続ける」というところで、ほんまもんにはずれはなれたら良いのだが、どちらかと言えば、京都が後押ししてきたのは新たな試みである。最初から本流を目指すのではなく、あえて新たなものを目指すことを尊重するところに京都らしさがあり、それが京都の価値。芸大もそのような現場。ほんまもんを強調されすぎると、少

しそうではないなという印象を受ける。「ほんまもん」は大切だが、新たな価値の創造という点も強調しておきたい。

野村特別委員

これは議事録に残してほしいのだが、僕は東大と京大とハーバードを卒業しているけれども、京大がぶっちぎりで変人だらけだった。辺境の極みで大好きである。息子はぜひ京大に行ってほしいと思っている。

宗田会長

このような会話が市長と芸術大学の前学長との間でできる距離の良さというのが、京都の良さである。

松井市長

京都の良さは、分野ごと、または地域的に「ここが中心」というのが重なり、「ここが全部の中心」というわけではなくて、「この分野ではこれが中心、あの分野では辺境」というように、中心と辺境が多重に存在するまちと私は表現することがある。オーソリティーがよければいいというわけではなくて、オーソリティーから外れた人たちがチャレンジや、新しい試みを行うというのは、伝統と革新であると思う。伝統を長期間守っていることも大事だが、それに対して新しくチャレンジする人もいるというは面白い。

宗田会長

まちなかにも変わった人が相当いるが、それが許される寛容さが大事なのだろうと思う。

松井市長

曾我副会長や杉田委員から御指摘があったが、理念を作るのは良いが、どのように具体化するかが大事。例えば、京都学藝衆をつくるとなったとき、どうやってつくっていくのか、京都市は何を応援するのか、家元の中に入っていくのか、という議論が次に絶対来なければいけない。

このビジョンにはある種の余白があって、どういう意味か、何をしていくかという議論につなげないといけないし、京都のビジョンとして、余白を自分で考え、議論が展開される場を作ることの意味ある。次の市長も含めて、ビジョンをどう受け止め、どう展開していくのか、長期的に議論し続けるものを目指している。そして、自分ごとにしていくことに意味があると思っている。

宗田会長

委員の皆さんも本日の議論を持ち帰っていただき、いろいろな人々と話してもらうことが、実現に向けた一つの動きになる。

第7回審議会において、ブラッシュアップしたものを議論したい。

(2) 事務連絡

司会（都市経営戦略監）

それでは、以上をもって第6回京都市総合計画審議会を閉会する。

3 閉会

(以上)